二者状況と三者状況における体験から見た広汎性発達障害
―PAC分析と円を用いた描画法による検討―

永山　智之

Ⅰ．問題と目的

広汎性発達障害のある人々は対人関係に難しさを抱え,とりわけ集団場面で困難を抱えることが多い。自身がアスペルガー症候群を持つ当事者である綾屋によると,慣れた人との一対一の会話の中では一瞬相手とつながったと感じることもあるが,集団の中ではつながりたくてもつながっている意識をもつことができず,「集団で楽しい気持ちを共有している」ように見える光景が魅力的であるという(綾屋ら,2008)。そして,「自分が集団の一構成員として,主体的に輪のなかにいることを自覚し,やり取りを重ねるうちに楽しいと言う気持ちが自然と湧き上がり,その気持ちを他の構成員と共有する」という体験を味わえているのだとしたら,うらやましくてたまらないというのである。しかし,実際の対人場面では,彼らは周囲と感覚を共有することが難しく,ずれてしまうことが少なくない。近年では,こうした彼らの特性を踏まえた臨床実践も報告されてきている。例えば,青木(2007)によると,彼らは一対一の時は何とかやれるが,相手が二人以上になると大変になる人が多いという。そこでは,精神分析的な発達論で言う二者関係から三者関係の段階への移行という問題と同質の問題を持つ場合もあるが,むしろ情報量の増加や気持ちを推測しなければならないという作業量の増加,複雑化により困難となることが多い。そして,彼らは集団場面でもあくまで一対一のやり方で個々の気持ちを読み,個々に対応しようとしていることが推測され,多数の人間の複雑な人間関係への対応の不得手さに対して,数人の小集団で慣れてもらうことが有用であるとしている。加えて,発達障害の子どもの中には友人関係をうまく築くことができずに集団の中で孤立してしまうケースも見られ,支援では友人関係の体験が自然な形で不可避に行われる場面設定がなされることが望ましいとされ,子ども一人をセラピスト一人が担当し,集団で実施する「グループセラピー」も取り入れられている(遠矢,2006)。さらに屋宮(2011)は,セミナー・グループ・個別相談の並行支援を通して,対人関係の問題が軽減したアスペルガー症候群の学生事例を挙げている。そこでは,①集団になると周りが見えなくなり,オーバーに興奮するか緊張して何も言えなくなってしまう②一対一の場面では,日によって態度が変わったり,思い込みから深追いしたりする癖がなおらない③何でも話せるいつも一緒の親友が欲しいと思い,三人の場面では競争的になり孤立し辛くなっていたという。

以上のように,広汎性発達障害のある人々の対人状況ごとのありように関して様々な臨床実践が報告されてきているが,彼らが実際の対人関係でどのように二者状況・三者以上の集団状況を体験しているかは十分に明らかになっているとは言い難い。そのため本研究では,彼らの二者状況(以下,二者)と三者状況(以下,三者)に関する体験を比較検討することで双方の体験の異同を明らかにし,どのような点に困難さがあるのかを探ることを目的とした。彼らの内観から各対人状況における体験理解を深めることは,治療構造ごとのよりよい援助のあり方や,彼らに合った治療構造の活かし方を検討する一助となりうるであろう。また,今回は日常的な体験を取り上げるために友人関係を扱うが,そこでうまくいっている対人関係の持ち方から援助の手

がかりも得られるだろう。

なお本研究では,個人内での二者と三者の体験の変化も含めて検討するために,二者から三者に移行する場面における体験を扱う。そして,個人の体験のありようを探る方法の 1 つとして PAC 分析(Analysis of Personal Attitude Construct)を用い,特徴的な体験構造を探ることとした。PAC 分析とは,個人ごとの態度やイメージの構造を測定するために開発され,クラスター分析という操作的な統計手法を用いながらも,「平均的な人間像」と比較することなく,「特定具体的な個人」の態度やイメージという主観的世界を描き出せることを最大の特徴とする(内藤,2002)。さらに,自由連想を用いることで,抑圧等の自我の防衛機制の影響を受けやすい,被験者の深層部の心理的内面構造にまで迫ろうとするものである(内藤,2002)。加えて,二者と三者における自他の関係構造を捉えるために,円を用いた描画法を用いる。岩井ら(1978)は「円は人間および人間と関係のあるあらゆる外界との関係を,象徴的に描き出すことのできる原型」で,人間が自他の関係構造をどう認識しているかを捉える方法とし,二者と三者における体験の個人内比較の方法として有効であることも示されている(永山,2009)。以上を踏まえ,PAC 分析による内的な体験構造と円を用いた描画法による外的な関係構造の捉え方を併せて検討することで,立体的に体験のありようを捉えられると考えた。

Ⅱ. 方法

対象:高機能広汎性発達障害があるとの診断を受けた,あるいはその疑いがある当事者 8 名(男性 5 名,女性 3 名;平均 36.1 歳(SD＝6.56),アスペルガー症候群 5 名,特定不能の広汎性発達障害 2 名,高機能広汎性発達障害 1 名)。 PAC 分析に関しては,うち 6 名からの協力を得た(他 2 名については協力者の時間の都合上,実施に至らなかった)。

手続き:二者・三者の体験に関してインタビュー,円を用いた描画法,PAC 分析の順に実施し,それぞれ二者・三者双方の体験を比較してもらった(表 1)。

Ⅲ. 結果と考察

1. 全体的傾向

まず,各協力者の体験に関する語りと円を用いた描画法を臨床心理学専攻の大学院生と合議の上,分類した。その結果,二者で楽しい体験をしていたのが 5 名(A,C,D,G,H;括弧内は協力者のアルファベット),楽しいがおろおろしつつ関わっていたのが 3 名(B,E,F)であった。一方,三者では他の 2 人についていく形になるのが 6 名(A,B,D,E,F,G)と大半を占め,孤立して寂しさを体験していたケースが 5 名(A,B,D,F,H)と多かったが,三者は楽だとしたのも 4 名(A,E,F,G)見られ,二者よりも三者が話題が豊富で盛り上がって繋がりが濃くなると言い,ネガティブな体験を全く語らなかったケースもあった(C)。加えて,話への入り方の分からなさ・ついていけなさはあるものの(A,D,E,F,H),入らなくていいから楽だったり(A,F),責任が減るし,もう一人来てくれて助かる(B,E,G)という語りも見られ,他の 2 人に会話を任せて聞く形をとっていた。「二者の方が楽しいが,三者の方が一人引いて突っ込み役で楽。聞き上手でも面白い話題を提供できるわけでもないし,勝手に他の人に喋ってもらった方が楽しいのではと思っているのかも(G)」というように,他の人が話す方がよいと「勝手に」判断して任せるなど,入らないことへの葛藤のなさが特徴的であると考えられた。そこでは,「切り込み方は分からないが,何が分かっていないか分からない(D)」「自己中心的と言われたり,いじめられてから,集団に限らず合わせようとしている。でも,何に合わせていいか分からないから,どうしたらいいか分からない(A)」など,分からないものに対する対応が意識はされるが,そのまま動けなくなっていることが窺えた。さらに,話を振ってくれない相手に対して被害的になっていたケースもあったが(B,D),1 名(D)が敵意を抱いていた以外は他者に直接否定的感情が向けられることはなかった。また,以上を踏まえると,二者から三者となって

表 1 インタビュー内容

①インタビュー

下記の質問項目について，a)二者場面 b)三者場面 c)両場面の比較の順に回答してもらった。

【二者(三者)場面に関する質問項目】

教示:「同性同学年の友人と 2 人きりでいるところを思い浮かべてください。そこにもう 1 人の同性同学年の友人が入ってきて、その後、続けて 3 人で話をしたという場面を思い浮かべて下さい」

・それぞれ、どんな人ですか？また、あなたとはどういった関係ですか？

①その二者(三者)での会話場面において，a)あなたは意識をどこに向けていましたか？b)またどのような感じで向けていましたか？

②その二者(三者)での会話場面において，a)あなた自身はどのような感覚で，b)どんな感情を抱きましたか？

③その二者(三者)での会話場面において，a)相手に対してどのような印象を持ち，b)相手に対してどのような感情を抱き，c)相手をどのような存在として感じ，d)どのように相手との関係を捉えていましたか？

④三者場面のみ：A)全体として B)二者場面からいた相手 C)三者場面から参加した相手について，それぞれどのように感じましたか？

【二者場面から三者場面に移行した時の他者の捉え方とその変化】

・二者の場面にもう 1 人の相手が入ってきたのは自身にとってどのような体験でしたか？

・その時，もう 1 人の相手はどのような位置づけでどのような感情を抱きましたか？

・三者場面になって二者場面からいた相手に対する感情・位置づけ，及び 2 人の関係はどのようなものからどのようなものになりましたか？

②円を用いた描画法

教示:「あなたは，二者(三者)場面においてどのような体験をしましたか？どのように自分や他者，自分と他者との関係を捉え，どのような感覚や感情を抱いたでしょうか？ただし，(二者場面からいた)相手をマルとして下さい。それ以外の人をマルで表現する必要はありません」

二者場面・三者場面それぞれの描画後に説明を求め，両方の描画が終了後，2 つの絵を比較してもらった。

③PAC 分析

(1)被験者に刺激文として「あなたは，参加した実験における二者(三者)場面において，どのような体験をしましたか？どのように自分や他者，自分と他者との関係を捉え，どのような感覚や感情を抱いたでしょうか？」という文章を呈示し，筆者が口頭で読み上げた。(2)このテーマに対して連想する全ての項目を思い浮かんだ順に自由に挙げてもらった後，内容の肯定・否定に関わりなく，被験者にとって重要と思われる順に番号をふってもらった。(3)二つの連想項目が言葉の意味ではなくイメージとして直感的に互いにどの程度近いかを 7 段階尺度で評定してもらった。全ての連想項目間の評定を総当たりで行った。(4)項目間の評定結果をクラスター分析(ウォード法)で処理し，デンドログラム(樹状図)を作成した。(5)被験者によるクラスター構造のイメージや解釈では，デンドログラムを提示し，被験者に以下の 5 つの内容を順に報告させた。 a) 形成されたまとまり(クラスター)ごとのイメージ・印象とその解釈， b) クラスター間ごとの比較とその解釈， c) 全体についてのイメージ・印象とその解釈， d) 個々の連想項目についての詳しい説明， e) 個々の連想項目についてのプラスのイメージか(＋)，マイナスのイメージか(－)，どちらでもないか(0)，プラスでもマイナスでもあるか(±)(注 1) に関するイメージ評定である。そして，(6)以上の手続きを二者場面・三者場面の順に行い，その後，PAC 分析の結果をもとに，各場面の体験に関して比較してもらった。(7)最後に，実験者は被験者からの報告や感じとったことをもとにクラスターの命名を行った。そこからさらに被験者の内面がどのように体系化されているかを総合的に解釈した。なおデータの処理には土田が開発した「PAC アシスト」(注 2)を用いた。

注 1：通常の PAC 分析では含まれていないが，今回は体験における両価的なイメージも検討するために導入した。

注 2：「PAC 分析支援ツール」 <http://wwwr.kanazawa-it.ac.jp/~tsuchida/lecture/pac-assist.htm>(2008 年 7 月 14 日)

孤立するように感じるのは対人恐怖症者 (笠原,1972,1977)と通じる点もあるが,対人恐怖症者と異なり,劣等感を抱いたり,後から加わった第三の人にどう思われるかに注意が向くことはないことが示唆された。

円を用いた描画法に関しては,関係構造のイメージを捉えるために高木(2002)を参考に位置関係に着目して分類した後,自分や他者の表現形態に着目して分類した。まず,位置関係に関しては,二者では【2 人でまとまる】(4 人：A,C,D,H),【投影なし(自分と相手の色が違う)】で「自分はハラハラ・楽しい。相手は余裕」(1 人：B),【相手がメインで相手の影響を受ける】(3 人：E,F,G)に分類された。一方三者では,【相手 2 人と自分という構図】(A,D,E,F,G)か【投影なし(自分と他 2 人の色で違う)】で「自分はさみしい。他の人は楽しそう」(1 人：B)の計 6 人が相手 2 人のやりとりが中心で相手 2 人の関係の良さを表現し,残り 2 人(C,H)が【三者が中心(話題)を意識する】表現を描いた。さらに具体例を見ていくと,「関係のイメージのなさ」「一方向的な関係の捉え方」「話題に焦点が当たった捉え方」といった特徴も窺えた。例えば B は二者でも三者でも【投影

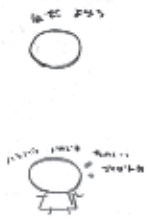

図１ B･二者(人型が自分)

図３ G･二者(人型が自分)

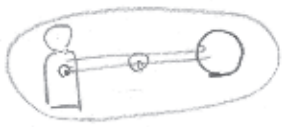

図５ H･三者(人型が自分)

図２ B･三者(左下が自分)

図４ G･三者(人型が自分)

図６ H･三者(人型が自分)

なし】に該当し,図 1,2 のように各人の配置は座席の位置であるとしたが,これは人数に依らない,関係のイメージのなさを示唆しているだろう。次に,G は二者では【相手がメインで相手の影響を受ける】に該当し,図 3 のように相手の話を聞いている時の自分を描いた。お互いに会話を交換しており,自分の話したいことに意識を向け,会話を聞いているとのことであったが、一方的に影響を受けている様子に見える。三者では【相手２人と自分という構図】に該当し,図４のように自分を中心に据えて見ているが,相手二人のやりとりを意味する線が太く,そこで「変なことを言っている方にチャチャを入れる」形で入っていく様子を描いた。最後に,H は二者では【２人でまとまる】に該当し,図５のように話題の内容に関する意識が一番で,自分の内の思いと相手が話に乗ってきているかということを意識し,相手とまとまりを感じていることが語られた。一方,三者では【三者が中心(話題)を意識する】に該当し,図６のように話題を中点としてそれを３人で意識している様子で,一方向的に話題を３人がそれぞれ見ているようにも見える。G･H では,相手や相手とのやりとりを意識してはいるものの,二者でも三者でも話題との関わりを中心とした一方向的な関係が窺える。今回,その他にも,二者でも三者でも話題が楽しめるかに焦点が当たった体験を挙げているケースも 3 例(C,G,H)あり,これらは話題が好きかつまらないかという捉え方であり,他者との関係が語られず,自慢話をするか(4 人:A,B,G,H),話題が出てこない状態となるもの(3 人:A,B,E)も見られた。畑中(2011)では,軽度発達障害の人においては,話が自分と区別された相手のものとして受けとられることがなく,〈発する〉―〈受ける〉,〈語る〉―〈聴く〉といった関係が成立しておらず,自己と他者などの本質的な区別なく生きていていることが示唆された(傍点原文のまま)。本研究では,協力者は一方向的に語ったり聞き役に回ったりする傾向があり,二者では話題自体を話すか聞くことはできるのでその傾向が表立っては問題にならないが, 話が誰の物であるかという区別,さらには自分と他者の区別がなされないために他者との関係も語られなかったと考えられる。さらに,話題への意識が他者への意識と同義であるかのように話題のことが他者との関係の代わりに語られたと推察される。そして,三者では「相手からの情報はどういう手段で得たかが抜け落ちて,ただの情報になってしまう(A)」などして話をどこに発し,どこから受けていいかが分からなくなってしまったり,話題という情報を

それぞれ一方向的に眺める人たちの集まりとして対人関係を捉えていることが示唆された。

加えて,大学(院)生への同様の調査(永山,2009,2010)では初対面の実験場面を用いたこともあるだろうが,自分から距離を調節していた体験があった。一方，今回広汎性発達障害のある人には,距離をとったり感じたりすることはあっても距離を調整するケースは見られなかった。そして,三者で「会話は他の二人に任せている。よく考えたら入らないですね(F)」と相手2人のやりとりに入っていかず,そのことを自覚してもいないなど,主体的に関係の中に自分を位置づけていく感覚がないまま,人任せの状態となっているが示唆された。さらに,円を用いた描画法を自分や他者の表現形態に着目して分類したところ,大学(院)生(永山,2009,2010)との違いとして,自分を表す表現や相手を表す円の表現が二者と三者で変化しないことや自他関係の不明瞭さ,投影のなされなさが示唆された。まず全ての描画のうち,二者から三者で自分や二者からいた相手の形が変化したものは,Bで自分が人型から円になった以外はなく,自分の形は三者で円(4人:B,C,D,F),人型(2人:G,H),半円(1人:E),四角(1人:A),三者からの相手は円(5人:B,C,E,G,H),円以外の記号(2人:A,F),人型(1人:D)であった。自他の表現が固定的であり,相互に影響を与えていてもそれで変形したりすることもなく,対人状況の変化による自分や他者,自分と他者の関係の捉え方の変わらなさが窺えた。すなわち,広汎性発達障害のある人においては,二者から三者になる時,先の位置関係で示唆されたような構図の変化のみがあることが示唆された。また,字を書いたり(2人:B,C),実際に周りにあった物(2人:D,F),物理的な立ち位置(2人:B,D)を描くケースも見られた。畑中(2011)は軽度発達障害のある人々のロールシャッハテストに“投影”がみられなかったことを指摘しているが,人間と人間の関係構造を象徴的に表す(岩井ら,1978)円を用いた描画法でも,大学(院)生(永山,2009,2010)のように象徴的なイメージは見られず,個人間のまとまり(3人:A,C,H)や影響(4人:C,E,F,G),心理的距離(1人:D),全体でのまとまり(2人:C,H)や話題の熱気(1人:C)，自分と他者の意識の向け方(1人:H)といった具体的な感覚レベルの比喩表現，及び話題(2人:C,H)や実際のやりとり(2人:C,E),そこにある物(2人:D,F)など,実在するものの直接的な表現が描かれていることが窺えた。こうした投影のなされない表現からは,彼らが人間と人間の関係構造を具体的な感覚や事物の次元で捉え,人数構造による自分や他者,さらに自分と他者の関係にイメージの変化を捉えていない一方,実際のやりとりの構造の変化は捉えていたことが示唆された。

2. 事例的検討

ここでは特に人数が多かった,二者で楽しく,三者で他の2人についていく形となり,孤立して寂しさを感じるという典型的な体験をしていたと考えられるA（診察時,アスペルガー症候群の疑いがあるとされた30代女性)のPAC分析と円を用いた描画法を踏まえた事例的検討を行う(図7から図10,表2から表4)。PAC分析の検討では，内藤(2002)を参考に,①被験者の内界を十二分に味わう②現代の学問の最先端の水準で解釈する③「かのように見える」「仮説的に○○であるかのように解釈することもできる」の考察を繰り返し,価値創造的な解釈をするという手順を踏んだ。Aは高校の同級生を想起したが,二者で想起したのは中学からの友人で,三者で想起したのは後でその友人との関係に新たに加わって友人となった人物であった。

まず,二者のPAC分析結果の1つ目のまとまり(以下,CL)は,「見守ってもらえる」「自由」「自分らしくしていて大丈夫」など,自分らしく自由に振る舞っているのを相手に受け入れてもらっていたという感覚を表すと考え,「①自由でいられる被受容感」と名付けた。CL2は「安定」「一体感」であり，相手との関係に一体感を感じて安定感を感じていたことを表すと考え,「②一体感のある関係の安定感」とした。CL3は,「相手のことに応えればいいという単純さへの安心感」という,相手が一人である構造のために作業が複雑化しないことからくる安心感であったと考え，「③作業が複雑化しない構造による安心感」とした。

次に,表 2 の CL 間の比較では,初めは自分の感覚を表すと考えられる CL1 と他者との関係を表すと考えられる CL2 の比較の解釈が「通じない」と述べていたが,関係性において許可されて自由となっていることに気付いて「似ている」となった。結果的には,見守られていることを守られている感覚を抱く自分ではなく,守ってくれている相手から提供される環境と結び付け，両 CL を自分の感覚と相手から提供されるものと捉えるようになったと考えられる。最初は分かってもらえている安心感と守ってもらえている落ち着いた環境はバラバラに認知されており,普段は自分の感覚と他者との関係が関連付けて意識されていないことが推察される。加えて，「ほっとする」「見守られてる」は一体感のある関係の安定感とつながりそうだとして,自分の感覚であるのに他者との関係に入れようとし,自分の中で自由と安心が混在するのでなく,自分の中の自由と他者からもたらされる安心として捉え,まとまりを無視して分け直そうとした様子が窺えた。これにより,他者との関係と自分の感覚,ないし自分の感覚と他者からもたらされるものの区分は曖昧となっているが,さらに元々どう捉えているのかが見えづらかった他者の存在自体も自分の感覚に回収される形となっており,自他の区別のない(村上,2008)他者不在の体験世界が窺えた。さらに,二者では CL2 と CL3 の比較で語られたように，単純さへの安心は自由と関連し,CL1 と CL3 の比較にあるように「守られてこそ自由」というような関係性からくる自由もあり,作業的にも関係性としても安心感が持てていたと考えられる。そして,全体について述べられているように，相手に保護される下で安心して自由に自分らしく振る舞うことができることが示唆された。最後に,全項目の単独でのイメージをみると,＋が 4 つ,±が 4 つ,0 が 1 つであり,二者における体験に肯定的なイメージとともに両価的なイメージを持っていることが示唆された。イメージに関する語り(表 2)からは,一体感を持ちつつも相手との違いを意識しようとする動きが見て取れ,自分のままでいること,相手との一体化や相手に頼ることへの両価的な態度を持っていたことが窺えた。ここでは,相手に頼り過ぎたり,相手と自分を一緒に見過ぎてやり過ぎたりと,自他の区別がなく(村上,2008),ほどよく頼ることができないので，まずそのために生じうる問題に対して意識的に気を付けることで対応しようとしていたとも考えられる。全体に関する語りも踏まえると,相手に保護され,相手の理解があるという条件付きで成立する関係の持ち方であり,いつまでもそれではしんどいことも分かってはいるが，子どもでいさせてもらいたいというように,どこか変わろうとしない所も窺える。そこには表 4 のような,相手を見な

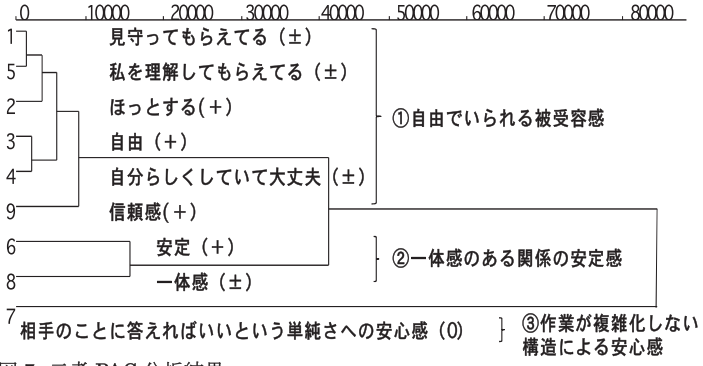

図 7　二者 PAC 分析結果

※デンドログラム(樹形図)は平方距離に基づく。数値は各連想語のイメージの非類似度を距離として捉えたものであり，類似度が高いものは近い距離で結びつく。また左の数字は重要度の順位を示す。

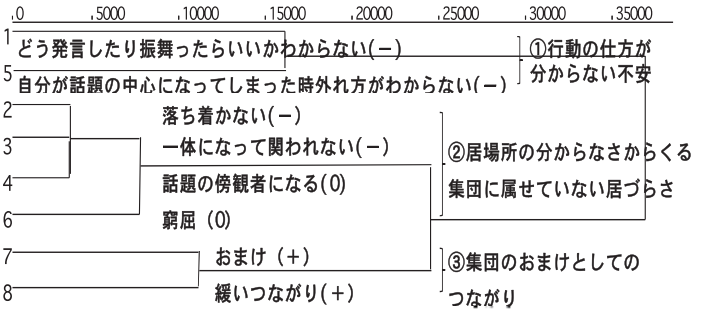

図 8　三者の PAC 分析結果

表2 二者に関するPAC分析の語り ＜ ＞は筆者の言葉

＜CL1はどんなまとまり？＞結構自分が変な奴っていう意識は元々あるから，その中で私っていうものを分かってもらえているっていう，そこから来る安心感っていうくくりですね。で，信頼感も一緒についてきているのか。だから，そういう自分を見守って，自分を受け入れてもらえているっていうことに対する相手への信頼なんですよね。おそらく，そんな私でもこの人は私を信頼してくれている。**＜CL2は？＞**二人の場がすごく安心して安定している，落ちついた場であるっていうことですね，あたしにとって，友人とニコイチ的な安心感，ある程度守ってもらえているところとかも絡んでくるかと思うんですけれども，その一体感とその落ちつきで，もう本当に落ち着いた環境って(笑)**＜CL3は？＞**そう考えるとCL2にも近い部分があるのかもしれないけれど，作業が複雑化しなくていいじゃないですか，言葉を受けて，全体に返すとか，あと何かまた違う人に返すとかそういうことを考えなくても，一対一だから，相手が自分に投げたらそのまんま今度自分が受けたものに対して相手に答えを返すっていうことをしていけば良いので，そういう作業的な部分で，複雑なことを考えなくていいので安心していられるっていう安心感ですね。

＜CL1とCL2を比較して？＞これはねえ，結構通じないんですよね，実はね。通じないって言ったら変だけど，ほっとするっていうのがCL1に入れてしまっているから，一見繋がりそうな気もするけれども，CL1は自分が自分のままでいてもいいよ，自由で居ていいよっていう，その許可の部分なんですね。で，その人との関係性においてはそれが許可されているっていう意味合いでCL1のまとまりは自由という感じだが，あー，そういう意味でなら似ているかなあ，でもその安心の出所がちがう。CL1のは自分の存在が認められてるっていう部分での安心感だけれども，CL2の安定とかの部分は，あー，じゃあ1はひょっとしたらCL1に入ってこなくて，CL2の方に入ってくる系統かもなあ，･･･あの，勝手やっていいっていう部分と，でも支えてくれている地盤はあるよっていう部分がCL2の感じなんですよ，あたしの中では･･･まあ似ているって言ったら似ているけど･･･そうそう，守られていてこその自由みたいな感じだからひょっとしたらの一番っていうのはCL1じゃなくてCL2だったんかも，そういう意味では。**＜CL2とCL3を比較して？＞**ここはもう歴然と差があるんで(笑)･･･CL2は基本的に，自分の所属というかなんというか，心の安定の部分だけれども，あの同じような，安心安定という風な関係だけれども，七番はもう単純に能力的に(笑)，あのー，そこまではできないっていうことを，しなくてもいいやという安心感だと思うんですよね。だから，さっき類似度比較をやっている時も，ああ，これだけ明らかに異質だと思いながら(笑)**＜CL1とCL3を比較して？＞**うーん･･･これも同じように関係がないと言ったら関係がないけれども，関係があると言えばありますね。というのは，答える時の単純さへの安心感だから，単純に相手のことに答えるっていうことだけで，相手に対して答える時にもいろいろ自分の中でこう，解釈って言ったら変だけど，相手の受けを良くするためにこう，手心を加えるとかそういうふうなことをしなくてもいいっていう安心感もあるから，その部分っていうのは，CL1のまとまりの自由な部分とも絡んでくると思うので，そういう意味では関係ありますね，安心感っていうところまで行った時に。

＜全体を通して説明すると，どんな感じになりますか？＞うーん，やっぱりかまってちゃんだね(笑)やっぱりあのー，まず子供でいておきたいんかな，という感じのところが自分でもやっぱり思うけど，こう保護されてる状況の下で自由にこう，やりたいようにやらせてくれ，そうしたらなんか結果は出すからみたいな感じ(笑)がほのみえるような気がします。作業においても，多分人間関係ででも，子供にいさせてもらうことに，安心感を感じてるんでしょうね。いつまでもそれでやってたらしんどいのも分かってるんだけど(笑)…力抜いてくつろいでいたいんだろな(笑)

＜各項目のプラスマイナスについては？＞まず，1はやっぱりなんかそれで安心感を持ってるのは間違いがないので，それでプラスに働く部分はあるけれども，なんかそれに頼ってしまうっていう部分があるんで，そこはどうもマイナスだと思ったんで，プラスマイナス。5はいいようにも働くけど，逆に理解してもらえていなかったら，その人とうまく関われないっていう，マイナスの部分が出てくるんで，どうしても。で，その裏の部分のところをとって，プラスマイナスにした。で，2は，ほっとするんだからいいじゃん(笑)3も自由でいい(笑)4をプラスマイナスにしたのは，うーんと，自分らしくしていてプラスで出てくる部分もあるんですけれども，私が自分のまんまにして行ってたら，なんかこう出てくる悪い部分もあるので，そういう意味で，それで大丈夫って思うのは本当にプラスだけか？いやきっとマイナスもあるだろうっていう思いでプラスマイナス。9は，信頼感はあっていいと思ったんで(笑)プラス。8をプラスマイナスにしたのは，あのー，ニコイチ的なこう一体感っていうのは安心できるんやけれども，それに頼り過ぎてしまったら，何って言ったらいいのかな･･･相手と自分を一緒に見過ぎてしまうところがあるので，やり過ぎてしまう可能性がかるっていう意味で一体感ってちょっと危険よねと思ったので，ちょっとマイナスの部分をつけた。7は，特にいいとも悪いとも何ともなくて，単純にもう本当に単純さが安心できるっていうそれだけの部分なので，ゼロでいいかと思った。

図9 A・二者(下の四角が自分)

図10 A・三者(下の四角が自分)

表3 三者に関するPAC分析の語り　＜　＞は筆者の言葉，（　）は筆者による補足

＜CL1はどんなまとまり？＞集団に，三人になった時の，その自分の振舞い方が分からないことに関するところで，その分からないっていうことの不安が出てる部分ですね。**(CL2)**自分の居場所が分かっていませんね，これ全部。落ち着かない，一体になって関われない。話題の傍観者になるっていう部分が入っているから，ちょっとそこは若干違うけれども，窮屈っていうのもそれで，基本的な居場所があんまりよく分かっていないみたいな感じで，一つのその繋がりの中に自分はいないよっていう感じのところですね**(CL3)**自分がおまけ，そういう意味ではCL2のまとまりと繋がってそうな気が。自分がその集団のおまけみたいな位置取りだなっていう感覚と，だからその集団と緩くしか繋がっていないなっていう風な思いがある。（CL1は）まず行動の仕方が分からない不安ですよね。（CL2･CL3は）すごい似た感じになりそうだけど･･･2つまとめて居場所のなさ（笑）＜**1個ずつ分けてもらったらどう？＞**疎外感まで言ったら言い過ぎだけど，そこの集団に属せていないっていう思いがあって，だからと言って完全に外れてるわけではない感じなんですよ，おまけとか，ゆるい繋がりで，何らかの繋がりは持っているっていう思いですね。

＜CL1とCL2を比較して？＞うーん･･･その全体の中に属していないっていう思いがあるからこそ，あることも一つの理由として，自分の振る舞いをどう取ったらいいのかが分からないところがあると思うんで，ああ，そういう因果関係的な関連性はあるかなあと思いますね。･･･ああ，因果関係があってそれで結局，こう不安とか不安定な部分に繋がっているっていうことでは結局一緒だね。**＜CL2とCL3を比較して？＞**これは，もう似ている部分が非常にあって，同じ居所のなさだけれども，CL2は漠然ともうその居所のないっていうところに，焦点が当たってしまっている気持ちの表現になって，自分とその，他の人のグループになってる部分との関わりがなさそうな取り方だけれども，CL3はそうではなくって，その私の友達との繋がりの中ででは，繋がりがなさそうで，でも何かちょっとした繋がりみたいなところはあるみたいな感じがあるので，似ているけどその繋がりが意識されているか繋がりが意識されていないかっていうところで違いがちょっとある。**＜どういうニュアンスの繋がりですか？＞**ひょっとしたら，キーパーソンになっている，その親友の友達を通しての，そこからぶら下がってのおまけだったり，ゆるい繋がりだったりするのかも。**＜CL1とCL3はどうですか？＞**あー，微妙にありますね，おまけだったりだとか，そういうゆるい繋がりしかないと思っているからこそ，振る舞いが分からないっていうのもありますね，あのー，完全にこう，信頼をおいてというか，化けの皮？ではないけれども，自我を出していい所かどうかって言ったらどうっていうところもあるし，ただそこまでは考えてこの項目は作ってないなあ。単純にたくさんいるから，その流れの中に乗れないっていう感じだな。うーん，流れの中に乗れなかったり，逆にだから，今度自分のところに話の番が回ってきた時に今度自分からの外し方が分からない。**＜あ，外し方も分からない＞**単純に話を振ればいいというけど，振るタイミングとか，振っていいんかなとか，どう振ればいいの？とかがあって，うーん，そこにメインを置いて作っている項目と考えたら，あんまり関係はないですね。因果関係もないです。

＜全体を通して説明するとしたら，どんな感じですか？＞うーん，三者になった時には，自分の位置取りが分からなくなってしまって，とりあえずそのグループに所属しておくために，おまけ的な，こうキーパーソンにぶら下がっている感じでそこにいるっていう安心感を何とか自分の中では持ってて，そのグループには何とかこぼれずにはいるんだけれども，その一方で，場の流れにどう関わっていったらいいのかが全然分からないで不安でいる私がいる感じです。

＜各項目のプラスマイナスについては？＞1は，これは分からないのでどうしようもないけれど，これが出来ないことにはやっぱり関われないんで困っていると思って，マイナスだな，どう考えても。5も1と似た形の項目なのでマイナス。2は，やっぱり落ち着いた状態でまずいるっていうのが，その場において安定して自分がいられる第一条件とは思うんで，落ち着かないのは，時間･空間を共有する時にマイナス要素だと。3は項目からして否定形になっているけれど（笑），一体になって関わりたいんでしょうね，関わりたいからこそ，それができないっていうのはやっぱりマイナス。**＜一体っていうのは？誰か･特定の人との，全体とのとか？＞**いや，もう全体の場ですね。4は話題の傍観者になっても，とりあえずその場にいることが出来るんだからゼロじゃないのかなと。6は，窮屈に感じていてもいるんだったらそれでいいじゃんと思ったのでゼロに。7はおまけっていう存在感でも，入れる方法を使ってでもいるっていう，きっかけを作れるっていうことで，これは考えようによってはプラスでいいんかなと。8もやっぱり緩くても繋がりは持てているっていうので，何で4の「傍観者になる」はゼロでこっちがプラスかは自分ではよく分からないけど（笑），でもこっちは肯定的に見ていいんじゃないかと。

＜二者と三者の連想語･クラスターを見比べてみると，どうですか？＞三者で私って緊張してるんでしょうね（笑）＜**実感がない？＞**うん，人には指摘されたことがあるけど。･･･二者の時は自分でいるけど，三者になった途端に私は自分じゃなくなるんでしょうか。自分が出せなくなるというか･･･関わり方がちぐはぐになってしまう時がある。･･･場には身を置くようにはするけど，そこに関わろうっていう意思が私，実は見えないですよね（笑）あー，自分で言ってなるほどって（笑）＜**ちぐはぐというのは？＞**話が見えなくなるんですよ。三者の方が，自分から話しかけに行かないと話が成立しないことが多いが，そのきっかけを私が作りにくいから，おろおろしてしまってる状態に。二者なら，否が応でも相手がまず何か声かけてきてくれるパターンが多いので，一度声をかけてもらったら，後は反応はできる。**＜三者で声かけられた時は，二人の時とはどう違うんですか？＞**その瞬間に自分の中では，声をかけた相手との二者空間になってしまうから，残りの一人が置いてけぼりになる。だから，基本的にこっちに球が飛んでこない限りは，私は完全に傍観者（笑）

かったり，自分をネタにするのみで，他者を主とし，接点とする関わりができず，一方向的な関わりしかできないしんどさもあり，A が自分を出すか出し過ぎないように引っ込めるかのみで他者との接点の見出せなさ・関われなさを抱えていることに、周囲は理解を示していくべきであろう。

表 4 描画の説明と語りのまとめ

二者: 立ち位置は友達の方が上。相手と被るから嫌と思って四角に。じっと相手のことを見ているって言う人が多いけど、実はそんなに人を見ていないし不思議。宙を見ることで自分を見ているかどうか。聞き上手だが，一方的に言いっ放し、聞きっ放しで質問をするのは友達の方だけ。相手が主の関わり方が分からず，相手に話を振ることができないので、場を持たすために自分をネタに接点を作るコミュニケーション。それ故かまわれないと混乱。自分の話をし過ぎるのはよくないという刷り込みから、喋らなくなって場がしんどくなる。相手のことは何を聞いたらいいかが出て来ないし，出て来ても失礼でないかが量りきれずに聞けないことも。

三者: 三者以上は一緒。人が増えるほど話の焦点がなくなって頭の中が散らかり、自分が出しにくくなるが。話が広がり過ぎて，一人の人の気持ちの中なら沿えるが，人と人がいて，こう思ってとか複雑になると分からない。何でかは分からないが、立ち位置としては自分の方が低い。話が基本的には相手同士で成立している気がするし、その方が楽な気がする時もある。相手2 人を囲っている部分にちょっと出口が出来ていて、ここから辛うじてちょっと関わっているつもりではいるけど、どうなんだろう？みたいな(笑)向こうから関わってもらっている時はここの口が広がって。片方の人とでも信頼関係ができていない時はここが閉じていると感じるし、しんどいが。二者からの相手と自分の方が仲がいい自信はある。私には、三者からの相手が私に意識を向けてくれていたかどうかすら分からない。三者からの相手は不安定要素だが，高校の頃は困ったと思っていなかった。個人とか関係でなく，話題に意識が行って把握に必死で，相手や自分がどう思っているかまで考えが行かない。相手同士の関係には意識は行かない。2 人の方が感情を入れた話もしやすくなるが、3 人はどうしても出来事を見る目が出て来て，頭で考えてしまう。三者以上の相手同士の空気は全然読めないのが何となく分かっているからこそ，アクションをかけにくい。相手の邪魔をしないタイミングが分からない。自分が話していたら自分に，相手が話していたら相手に注目してしまって。自分が主役ならいいが，自分が脇役になると身の置き所や振る舞い方が分からなくなる。

一方三者では,まず CL1 は,「どう発言したり振る舞ったらいいかわからない」「自分が話題の中心になってしまった時外れ方がわからない」というように,三者における行動の仕方の分からずに不安であったことを示すと考え,「①行動の仕方が分からない不安」と名付けた。CL2 は,「落ち着かない」「一体となって関われない」「話題の傍観者になる」など,三者全体で一体となって関われずに一人傍観者となり,自分の居場所が分からなくなって居づらくなったことを表すと考え,「②居場所の分からなさからくる集団に属せていない居づらさ」とした。CL3 は「おまけ」「緩いつながり」で，自分が集団の中で完全には外れずに,おまけ的な位置づけで何らかの繋がりは持っていたことを表すと考え,「③集団のおまけとしてのつながり」とした。

次に,表 3 の CL 間の比較では,CL2 と CL3 は似ている一方,CL1 と CL2 は関係あるのに CL1 と CL3 は関係がないとした点が特筆される。序盤は認知的な問題ではなく,繋がりを感じられない故に振る舞い方や自分の出し方が分からないとしていたが,話しているうちに入り方が分からないという認知的な問題ゆえに関係が築けないという形になった。最終的には,全体に属しておらず,全体と繋がりを感じられなくて振る舞い方が分からないというように,受動的にいること，自分の位置づけや求められていることが分からないのは関係への所属感の問題だとされた。その一方で,「たくさんいるから,その流れの中に乗れない」という語りのように,「おまけ」の状態から相手 2 人のやりとりに自分で入っていくことができないのは認知の問題であるとされた。このように PAC 分析を通して,受動的にいることはできるが,能動的に動いて何かをすることはできない困難さがあるという形で整理されていく過程が窺えた。最後に,全項目の単独でのイメージをみると,＋が 2 つ,－が 4 つ,0 が 2 つであり,三者における体験にはやや否定的なイメージを持っていることが示唆された。イメージに関する語り(表 3)では,おまけや傍観者であることに否定的でないのが特徴的であった。しかし,CL 全体に関する語りや表 4 からは,三者でも二者と同様にキーパーソンに保護される受け身的な形での一対一のやり方による一方向的な関係の持ち方であることと,三者になることでの作業の増加・複雑化・質的変化への対応の難しさが困難さに繋がっていたと考えられる。さらに,だからといって人数構造を無視する訳ではなく,その場全体を意識しつつ情報処理が難しくなっていたことも窺えた。

総じて,二者でも三者でも関係に属していると感じられるかどうかが,安心して振る舞い,その場にいられるかどうかと関連している一方,作業が複雑かどうかで主体的に関わっていけるかどうかが変わるということが

示唆された。また,その場にいることは「相手の許可」によって成立し,とりわけ二者からいた親友個人という具体的な受け止め手となる対象との繋がりが支えとなり,必要条件となっていることが推察される。徳田(2010)によると,二人関係の世界においては,自分と相手の直接的関係がすべてであり,たえず自分を中心とした関係の中において,相手と相互にどこかで融合しあった部分をもち,相手が主であれば自分が従,自分が主であれば相手が従,といった非対称的な関係になりやすい。他方,三人関係の世界においては,自己対他者という対称的・対峙的構造の中での社会的規範が絆となって関係が成立し,自己と他者とが 1 つの単位として成立しているという。これらを踏まえると,三者は非融合的・非直接的な関係の持ち方や各自の独立した自発的な関わりが要請される人数構造であると考えられる。そして,表 3 のように何となく場全体に合わせないといけないと思って合わせようとするが,三者では関わってこられない限り具体的な受け止め手となる標的が見出せず,自分に直接向かない話であると話が見えなくなってどう合わせていいか分からずにいたのだと推察される。しかし,二者空間になることを躊躇するが，それ以外の方法での関わり方が分からずにおろおろしてしまっていたのであろう。

二者の CL3 では，「相手のことを考えればいいという単純さへの安心感」という相手への意識を示唆する項目が挙げられた。しかし,A は自分以外の他者に対して自分がどうするか,どう感じるかという側面は連想語や語りで表現している一方で，他者の印象・感情や他者同士の関係については語らず,他者との関係の捉え方も一体か一体でないかということ以外は不明確であった。A にとって,他者は自分の存在の受け止め手であり,自分を出す自己表現の標的のような存在であると考えられる。畑中(2011)によると,軽度発達障害のある人々は他者から差し出されたものを受けとる主体として存在しておらず,結局のところ積極的にも受け身的にも何かと本質的な接点をもつことがないまま,あらゆるものと表面的に触れながら生きているという。A は,表 4 のように二者では相手から関わってこられることで初めて自分を出す対象を発見するが,一方向の発話の応酬であり,聞き役ではあっても受けとる主体とはなっていないと考えられる。さらに,三者では自分を出す方向も定まらなくなり,自分から主体的に動くことも出来ず,話題や他の 2 人のやりとりなど表面的な行動に焦点を合わせようとし,合わせられないなりに分からないものに合わせようとして，その場に受け身的にいる形をとっている様子が窺えた。こうしたあり方になるのは，主体が確立しておらず(河合,2010)，自分と他者の区別(河合,2010)や対象との距離(広沢,2010)がなく,三人関係を成立させることができないためであると推察される。さらに,そこでは他者に合わせることと自分のペースを維持することの両立しがたさが想定でき,それは葛藤というより，“同時並行処理の苦手さ”(三好,2011)のためと理解できるのではなかろうか。すなわち,表面的な行動に焦点を合わせようとして,そこに気を取られて他者の感情などが見えなくなるとともに,自分が関わろうとしていないことや緊張していることに対する自覚の無さなど,自分のあり方に意識が行かない形となり,主体的に動くことが意識から抜け落ちていることが推察される。

また,表3の二者と三者の比較部分や表4の語りからは,自発性・自立性や客観的・複眼的視点,場全体との調和やタイミングなどの「間」に関する問題といった,三者という人数構造で生じる難しさがあり,一対一での関係が成立しないと「居場所の分からなさ」が生じ,振る舞い方が分からなくなることが推察された。康(2000)は「間」について“①自分と他者との心理的距離,②コミュニケーションのリズムやタイミング,③その場全体の雰囲気がしっくりくるかこないかといった皮膚感覚に似た調和の感覚”と定義し,対人恐怖が起こりやすい状況として「間の悪い状況」を挙げた。そして,自分の親しい友人の他に，もう一人あまり面識のない人と三人で話をする状況を非常に心理的距離の取りにくく,「間」の緊張があって対人緊張の起こりやすい状況とした。さらに「間」の問題は自分の「居場所」の問題と関係し,間が悪い状況では,居心地が悪くてその場

に安心していられない気持ちになるという。Aの場合,「間」の感覚が成立しておらず,「間」が分からないなりに「間」が悪くならないように合わせていたように思われた。そして,居場所は分からないが,その場に安心していられない感じはなく,緊張に実感がない状態で,その状況に対して主体的に自分から関わることも退くこともせずにいることが窺われた。ただ,「間」が分からず,他者(二者からいた相手)と個別の繋がりは感じても全体で一体になれないために,分からなさによる不安定さを感じたのであろう。Winnicott(1987)は「することdoing」に先立って「いることbeing」が保障されていることが必要だと述べたが,周囲の人々にはAが「間」が分からないままで「いること」を保障し,安心して分からないままでいられるような関わりが求められよう。そして,自己と対象との距離がなく(広沢,2010),「間」のない世界に生きている彼らと,感覚運動的遊び(古賀,2006)のようにリズムやタイミング,皮膚感覚的な一体感を共有しつつ,セラピストが他者として境界となる機能を果たすことで「間」の感覚が関係の中で芽生えうるのではないか。「居場所」は「自分」と関連するとされるが(北山,1993),彼らの「自分のなさ」(田中,2009)を踏まえると,「居場所のなさ」の元となる「居場所の分からなさ」の背景には「自分の分からなさ」を想定しうる。そのため,集団で「居場所」が分からないままいながら,一対一の個別の他者との間で「自分」という感覚を感じ,形作っていくことがまずは重要だと言えよう。

以上のように,Aには二者では一方向的やりとりの受け止め手がいることで一体感を感じることができ,三者でも一対一の個人的な繋がりがあることで集団にいることができるというあり方が窺えた。A自身もこれまで今回の友人を含め,「一対一で絶対的な関係にある人を要にして集団に関わるという方法をとり,言いたいことはその人経由で言ってきた」と述べた。これらのことからは,広汎性発達障害の事例では,セラピストとの一対一の繋がりを支えとしてもらいながら,クライエントの体験しうる,三者以上の集団場面での「居場所の分からなさ」や場全体での一体感の持ちにくさを念頭に,第三者と繋いでいく支援のあり方が重要であることが示唆される。そしてその1つの方法として,グループにおける個別担当制など,関係が保障された構造も有用となると考えられ,その際,「天然キャラを演じて場を占めたり,面白い人役をしてきた。構っていくのは苦手なので,構ってもらうのが小さい頃からの処世術(A)」というような当事者独自の工夫も参考となろう。

最後に,他の診断カテゴリーと対比する。例えば,境界例患者にとっての人間関係は1対1関係の総和に等しく(鈴木,1999),自己愛性人格障害の者は自分とそれを取り巻く観衆というように振舞う(大森,2006)。広汎性発達障害のある人々も,一見これらの人々の関係の持ち方に類似するように見えうるが,A の事例を踏まえると,彼らの場合は“同時並行処理の苦手さ”(三好,2011)など情報処理が関係して1対1,ないし自分対他者といった関係の持ち方になることが推察される。さらに,対人恐怖症者の場合は二者は比較的自由に構成できるが,そこへ第三者が入ってきて自分が話していた相手と会話を始めると,3 人の中で自分だけが仲間はずれにされたようで,ひどく劣等感をおぼえ(笠原,1972),その第三の人にどう思われるかという不安が起こる(笠原,1977)。そして,小川ら(1987)はこのことを踏まえ,二者での二人称の他者との関係に侵入してくるライバルとして第三者を捉え,そのライバルと二人称の他者が結びつくことで,患者が二人称の他者との結びつきから排除されてしまうとした。一方,A は一人になることに必ずしも否定的・葛藤的ではなく,ライバル関係や第三者にどう思われるかといった,三者状況の内包する社会性や自己意識・他者意識,そしてそれにまつわる葛藤が窺えない点が異なるだろう。また,そこでは,(自分の方が先にいた状況なのに)相手同士でまとまっているように捉える点は先の対人恐怖症者の体験(笠原,1972)と通じる点もある。しかし,Aは表4 のように相手同士の関係は意識せず,「話が相手同士で成立している」と行動の次元で完結したやりとりと捉えていた一方,対人恐怖症者は相手同士の結びつきという心理的次元での関係の排他性に反応していたことが推察される。

Ⅳ. 今後の課題

本研究でPAC分析・円を用いた描画法を用いたことは,視覚優位で客観的に自分を見ることが不得手な広汎性発達障害のある当事者には,自覚していなかった体験に関して気付きを生む機会ともなったと考えられる。特にPAC分析は自他の区別のない混沌とした世界を生きる(畑中,2011)彼らの体験世界を言葉にまとめ,構造化して捉え直す機会となった点で有用であることが窺えた。円を用いた描画法は投影的な解釈は難しかったが,関係構造のイメージ,特に「双方向的関係」や「他者との関係」など,一般大学生(永山,2009,2010)には想定しえた関係のイメージが「ない」という形で特徴が示唆された。ただし,協力を得られた人数が限られたため,一般化には慎重を要する。今後,広汎性発達障害のある人々に共通する仮説モデルを生成することが課題となる。臨床実践では,集団で彼らが感じることができ,待ち望んでいる一対一の繋がりをセラピストが提供しつつ,集団と繋ぐ補助自我機能を果たすことで,彼らが欠く集団との繋がりを感じる一助となることが求められる。しかし,その後どのような関わりをセラピストが果たしていくかについては,今後の臨床実践の中での知見の集積が待たれる。その1つの手掛かりとして,当事者グループには,グループではあるが1対1のやりとりを中心に,それを周りの人が黙って聞いたり,誰か一人の発表に近い悩み相談を土台とする形式をとっている所もある。一人が話し終わるまで待ち,その話をまとめて本人に返したり質問したり,その話から想起した各自の似た体験を各々が話すという形のグループである。このように,特に集団場面で困難となりやすい彼らに対しては,彼らの体験世界に沿ったグループの活かし方が大切となろう。さらに,周囲の人々が彼らの体験世界に歩み寄り,「緩いつながり」を感じて否定的になり過ぎずに傍観者でいられる面を尊重していく関わりの可能性も視野に入れることが望まれる。それと共に,自覚しないうちに他者と主体的に関わることをしなくなって受け身的でいる彼らのあり方を, 時に動かしていくことも重要となろう。

<付記>ご指導頂いた本学研究科の田中康裕先生、調査にご協力頂いた方々に心より御礼申し上げます。なお、本研究は日本臨床心理士資格認定　協会及び日本心理臨床学会の助成を受けました。

[文献]

青木省三(2007):成人期の広汎性発達障害への援助 そだちの科学, **8**, 47-54.
綾屋紗月・熊谷晋一郎(2008):発達障害当事者研究－ゆっくりていねいにつながりたい 医学書院
畑中千紘(2011):話の聴き方からみた軽度発達障害－対話的心理療法の可能性 創元社
広沢正孝(2010):成人の高機能広汎性発達障害とアスペルガー症候群－社会に生きる彼らの精神行動特性 医学書院
康 智善(2000):「居場所」と「まなざし」の対人関係 小林哲郎・高石恭子・杉原保史(編)大学生がカウンセリングを求めるとき－こころのキャンパスガイド ミネルヴァ書房 pp73-88.
北山 修(1993):自分と居場所 岩崎学術出版社
古賀 聡(2006):グループセラピーの方法論 針塚進(監修)遠矢浩一(編著)軽度発達障害児のためのグループセラピー ナカニシヤ出版 pp27-38.
岩井 寛・田久保栄治・金盛浦子・藤田雅子・五島しづ・森田孝子(1978):マルと家族(1)－全体精神療法の1技法 芸術療法, **9**, 7-15.
笠原 嘉(1972):正視恐怖・体臭恐怖－主として精神分裂症との境界線について 医学書院
笠原 嘉(1977):青年期－精神病理学から 中公新書
河合俊雄(2010):はじめに－発達障害と心理療法 河合俊雄(編)発達障害への心理療法的アプローチ 創元社 pp5－26.
三好 輝(2011):発達障害の神経作動特性≒神経過敏+切替困難へのアプローチ 青木省三・村上伸治(編)成人期の広汎性発達障害 中山書店 pp209-242.
村上靖彦(2008):自閉症の現象学 勁草書房
永山智之(2009):二者関係から三者関係に移行する場面における主観的体験の変容－大学生同士の対人場面を用いて 心理臨床学研究, **26**(6), 741-747.
永山智之(2010):二者状況から三者状況に移行する場面における自他の捉え方を巡る体験とふれ合い恐怖的心性・対人恐怖心性 京都大学大学院教育学研究科修士論文(未公刊)
内藤哲雄(2002):PAC分析実施法入門－「個」を科学する新技法への招待 ナカニシヤ出版
小川豊昭・笠原嘉(1987):構造としての対人恐怖パラノイア 高橋俊彦(編)分裂病の精神病理15 東京大学出版会 pp257-284.
屋宮公子(2011):福岡大学における自閉症スペクトラム障害の学生相談－グループを活用した発達支援 精神療法, **37**(2), 54-58.
大森智恵(2006):境界性人格障害者と自己愛性人格障害者の治療的関わりを巡って－クライエント,臨床心理士そして精神科医の三者関係から生じる布置 心理臨床学研究, **24**(3), 312-322.
鈴木 茂(1999):境界事象と精神医学 岩波書店
高木 綾(2002):青年期における異なる自己像とその関係性イメージについて－いわゆる「本当の自分」と「借り物の自分」の観点から 心理臨床学研究, **20**(5), 488-500.
田中康裕(2009):成人の発達障害の心理療法 伊藤良子・角野善宏・大山泰宏(編)「発達障害」と心理臨床 創元社 pp184-200.
徳田仁子(2010):思春期・青年期のコミュニケーション－<関係>から<共有>へ 京都光華女子大学人間科学部人間科学科(編):ひと・文化・発達 ナカニシヤ出版 pp129-147.
遠矢浩一(2006):グループセラピーの理論的背景 針塚進(監修)・遠矢浩一(編著)軽度発達障害児のためのグループセラピー ナカニシヤ出版 pp1-16
Winnicott D W (1987):Babies and their mothers ed. Winnicott C, Shepherd R & Davis M Reading MA: Addison-Wesley

（心理臨床学講座　博士後期課程3回生）

（受稿2012年9月3日、改稿2012年10月31日、受理2012年12月27日）

Pervasive Developmental Disorder through Subjective Experiences in Dyads and Triads: Using PAC Analysis and a Drawing Technique of Using a Circle

NAGAYAMA Tomoyuki

Experiences of dyads and triads were investigated from the perspective of Pervasive Developmental Disorder, by using PAC (Personal Attitude Construct) analysis and a drawing technique of using a circle. Moreover, the patterns of relationships of individuals with pervasive developmental disorder were investigated. Many participants with pervasive developmental disorder in general had positive experiences in dyads, whereas in triads, many people felt that it was difficult to participate in conversations and in most cases followed the other two people. Some people felt lonely in isolation, while others felt comfortable. Furthermore, though it was difficult to make a projective interpretation of a drawing technique of using a circle of each individual. There was no image of possible relational structures in general university students, such as “interactive relationships” or “relationships with others.” Both in dyads and triads, a woman with suspected Asperger syndrome could feel a sense of belonging in a relationship, or not be affected, being at ease and staying at the scene. Furthermore, it was suggested that work complexity was related to active participation. To obtain “the other’s permission” was necessary for staying at the scene. Especially, relationships with people that were accepting of participation (i.e. close friendship) were essential. It would be important to maintain one-to-one relationships through an individual care system in the group and to support the participant through playing auxiliary ego functions of clients with pervasive developmental disorder, considering “difficulties in finding a place of one’s own” and difficulties in having a sense of unity in a group consisting of more than three members.